

みすていく☆ばる〜ん 投稿ステージ名作集 ミスティア探検隊と6つのオーブ

【第2話】

ミスティアが図書館で受け取った20冊の文献は、みすばる王国の遺跡や迷宮に関するものでした。普段の勉強にはそれほど身が入らないミスティアも、探検のことになれば話は別。図書館で夜遅くまでページをめくる毎日が続きました。

あれれ、ミスティアは疲れて眠ってしまっているようです。どんな本を読んでいるのか、ミスティアの肩越しに、そっと覗きこんでみましょうか……。

【ヒンデミット探検記 1巻】

「ヒンデミット (HinDemiTh) 伯爵が、王国を代表する探検家であることは論を俟たない。ヒンデミット伯爵の最大の功績はおそらく、自身の探検記録を克明に記した手帳であろう。その大型の探検手帳には、伯爵が歩いた秘境の数々が、実にリアルに描き出されていたのである」

「このヒンデミット探検記は、旅の成果を世に広め伝えるべく、伯爵の探検手帳を有志が書き写したものである。数年前の探検中にヒンデミット伯爵からの音信が途絶えたことは無念であり、13冊にまで及んだ探検手帳の原本も、伯爵と共に私たちの前から失われてしまった。国民の中には伯爵は今でも探検を続けていると信じているものも多く、ヒンデミット伯爵が再び戻ってくることを切に願う」

【みすばる探検隊ギルド掲示板ログ 7巻】

- * 「出口のない家」突破できました！もう出られないかと焦りました！
- * 巨大クリスマスリースめっちゃきれいでした♪ デザイナーは全国的に有名なんだって～。
- * 迷宮オブザイヤーのノミネートは「緑玉の違和感」ほか5作品。式典参加ご希望の方はギルド本部まで。
- * 「月刊鍵ランド」「月刊ダンディキング」創刊記念号発売中！

おや？ 本の中に古ぼけた紙が挟まっているようです。何が書かれているのかまでは、私たちには分かりませんが……。

* * *

ミスティア

「せんせー！ 院長せんせー！ 宿題おわったよ！」

【ミスティアは 分厚い本20冊を手渡した】

【ミスティアは **ブルーオーブ**を手に入れた！】

みすていっく☆ばる～ん 投稿ステージ名作集
ミスティア探検隊と6つのオーブ

図書館長

「王様から、勝手に探検に出ないでまっすぐお城へ戻るようにとの伝言を授かっています。外は寒いですから気をつけて」

ミスティア

(ぎくっ、バレてる?)

～お城にて～

ミスティア

「おーさま！ ブルーオーブもらってきたよー！！」

王様

「よしよし、文献調査ご苦労であった。有名な遺跡や他の探検家について、いろいろ勉強になったのではないかな。オーブはミスティアに預けておこう」

王様

「さて、次のオーブだが、今のところこれといった手がかりは得られていないのだ。そこで当面のあいだ、ミスティア探検隊は王国ギルドに所属し、自由に活動を行うこととする。大臣、詳細を」

大臣

「かしこまりました。王国ギルドというのは、我が国で商工業や探検業などに従事する者の互助組合です。わかりやすくいえば助け合い組織ですな。探検家は単独で活動することが多いですが、ギルドでの情報交換は欠かせないと言われております。そもそもギルドの本質には社会制度の変遷が密接に関わっており、その要点をごく簡単に言うならば……」

ミスティア

(ひゃっ、ごく簡単にとか言っときながら長い話がはじまるパターン！)

「あっ！ あのっ、探検隊ギルドの本なら図書館で読んだからよく知ってるよ！

じゃあさっそくギルドに行ってくるね！」

そう言ってミスティアは駆け出していきました。

もうすぐ王国聖夜祭。ランタンの灯りが街を照らします。

ミスティア

(はっ、あのこと王様に話そうと思ってたのにチャンスがなかった。

そうだ、秘密にしておいてあとでびっくりさせちゃおう！)

*

*

*

みすていっく☆ばる～ん 投稿ステージ名作集 ミスティア探検隊と6つのオーブ

聖歌隊の練習がどこかから聞こえてくる寒い朝。
うっすら積もった雪に足跡を残して、ミスティアは王国ギルドまでやってきました。さっそくギルドの登録に向かいます。

ギルドの受付員

「——はい、登録は完了です。これでミスティアさんはギルドの基本的な施設をご利用いただけます」

ミスティア

「どんな施設があるの？」

受付員

「ギルド中央のラウンジは、探検家の皆さんの交流と憩いの場になっています。ラウンジの奥には調査報告などに使う掲示板も置いてあります。2階には資料編纂所があります。王国内のステージ一覧や熟練探検家によるアドバイス集などを取りまとめています。それからクエスト窓口ですが、私が説明するよりも、初めての方向けのクエストを受けて頂くほうが分かり易いと思います。ここまでで何か質問はありますか？」

ミスティア

「王国内のすてーじ？」

ギルドの受付員

「あ、すみません。ステージというのは探検対象となる場所のことです。探検界の業界用語なんです。遺跡でも迷宮でも、雪原でも山脈でも、どんな場所だろうとひとまとめにしてステージと呼んでいます。ほら、ステージって言葉は、舞台という意味もあるでしょう？ だから私は、自分の活躍する舞台、っていう探検家の皆さんの矜持まで感じ取れるような気がして好きな言葉なんです」

ミスティア

（きょうじ、ってなんだろう……あ、それよりも！）

「国内のステージ一覧をまとめていることは、どの遺跡がまだ発掘されていないかも分かるの？」

ギルドの受付員

「ええ。発見はされているものの探索が完了していない遺跡は分かります。王国には未発見の遺跡などが数多くありますが、王都に近い地域に限れば、すべての遺跡の存在が明らかにされていると言ってよいでしょうね。どうかなさいましたか？」

ミスティア

「あの、実は図書館で偶然、ヒンデミット伯爵が残した手紙を見つけたの…！ これ絶対みんなには内緒ね！」

みすていっく☆ばる～ん 投稿ステージ名作集 ミスティア探検隊と6つのオーブ

「『ヒロビロノ ハシゴツラナム コヤウラニ ギンノハウジュヲ カクスモノナリ』

この言葉が指し示すは、いま私がいる場所に相違ない。
灯りを向けると梁の奥で光が跳ね返る。
しかし足場を積み上げる術が判らぬ。
梯子を掴みながらでは、足場を思うように運べぬ。
魔力球に触れると土台から崩れてしまうようだ。

これまでの探検において、最大級の難所である」

……手紙はここで終わっている。

ミスティア

「この暗号みたいな言葉のうち『ハシゴツラナム』は、梯子ツラナムじゃないかなあ。
『ギンノハウジュ』はきっと銀の宝珠のこと。銀の宝珠がどうなったのか、手紙には書いてないの」
「お宝はきっとまだこの場所にあると思う。未発掘の遺跡をギルドの記録で調べてほしいんだけど……」

ギルドの受付員

（全容が解明されていないステージなんて何百もあるよ……。この子に『みんなには内緒！』って言われたから私が調べないといけない雰囲気じゃん……。『探索が完了していない遺跡はわかります』とかエラそうに言わなきゃよかったあ。宝の手紙だって本物だとは思えないけど、この小さな子にそんなこと言えないし、どうしよう。今日は友達との新年会なのに、残業は絶対いやだよ。がんばれ私、考えろ私、……！）

「えっと、あ、ミスティアさん？ それならあなたはすごく運の良い方ですよ！ ヒンデミット伯爵が書き残した宝の手紙なら、伯爵が探検した地域のどこかを指し示すのではないかしら。いまギルドでは王都近郊の探索完了に力を入れているのですが、対象としている地域は、伯爵の探索エリアとほとんど重なっていたと思います。詳しくはギルドラウンジに掲示がありますから、そちらをご覧くださいはいかがですか？」

ミスティア

「つまり私の探していた情報が、もうラウンジに貼ってあるってこと？ 受付のお姉さんありがと～！」

ミスティアはお礼もそこそこにギルドラウンジへ急いで向かいます。受付員は面倒な調査を抱え込まずに済んで一息。ギルドラウンジでは、二人の様子を遠くから見ていた探検家がすっと席を立ちました。

みすていく☆ばる〜ん 投稿ステージ名作集
ミスティア探検隊と6つのオーブ

* * *

ミスティア

「きっとこの扉の先に銀の宝珠が……」

それから数日後、ミスティアは「曠然たる十二堂」と呼ばれるエリアにいました。ギルドラウンジの掲示と「ヒンデミット探検記（第8巻）」を頼りにしてやってきたのでした。3つの建物を横目に走って通り過ぎ、ミスティアの手が第四堂の扉の取っ手にかかります。

蝶番が軋む音が響き、暗がりを見込んだミスティアを待っていたのは無数の縄梯子。梯子は天井から吊り下がって床まで届き、縦横に複雑に連なって空間を埋め尽くすほどです。しかしよく見ると、あちこちに梯子が欠けたところがあり、その隙間に挟まるようにしてバルーンとジャンプ台、それに魔力球が置かれています。

梯子を渡りながら突きあたりまで進むと、一番奥まった位置にだけ不自然に梯子が無いことに気づきます。その場所で見上げると、梯子が吊り下がるべきところに屋根裏の小部屋が。ミスティアが手元の灯りを向けると、光がかすかに反射するのが見えました。銀の宝珠は確かにまだここに眠っているのです！

ミスティアはさっそく足場を積み上げにかかります。4つの魔力球すべてに触れると土台が消えてしまう仕掛けは手紙で学習済みです。魔力球を残すように慎重に移動し、ジャンプ台を活用しながら1つずつバルーンを重ねていきます。

ところがバルーンの数足りません。7個は重ねないと届かないのに、部屋の中にバルーンは6つ。そのうち1つは床近くにあって全然役に立たず、ハシゴの隙間にもバルーンが1つ必要とあっては、3つも不足する計算です。

ここでミスティアは、足場の一番上にジャンプ台を持ち込むことを思い付きます。いったん建物の外に出て扉を開け直すと、不思議な力で仕掛けは元通り。バルーンを7個重ねる代わりに、バルーンを4つ積んだ上にジャンプ台を乗せられれば、屋根裏部屋に手が届きます。

しかし今度もうまく行きません。バルーン4つを重ねるところまでは簡単に進むのですが、梯子の合間にあるジャンプ台の位置が僅かに低く、4つ目のバルーンに乗せられないような構造になっています。もしやと思って魔力球をすべて取ってみました。土台を失ってはお手上げで、途方に暮れたミスティアは座り込んでしまいました。

「お困りかしら？」

みすていっく☆ばる〜ん 投稿ステージ名作集
ミスティア探検隊と6つのオーブ

入口から声が聞こえます。

ミスティアが顔を上げると、長い髪をした女性と目が合いました。どうやら彼女も探検家のようです。外の光を背に受けて、表情はミスティアには分かりません。

「宜しければお手伝いしましょうか？」

思いがけない優しい声に、疲れていたミスティアはただ頷きます。

探検家は微笑んだような仕草をすると梯子のほうを向き、何かを思い出すように考え出しました。

扉が閉まったあとは物音ひとつ無く、ミスティアは梯子の合間にある魔力球をぼんやりと見つめます。魔法陣が描かれた緑の球は、支えもないのに宙返りを繰り返すように回り続けています。魔法陣が下へ消えて、また上から表れて。上から下へ、下から上へ。そのうちに少しずつ緑が近づいてきて……。

足音がしました。

はっと気が付くと、さっきの探検家はもう梯子を登って天井近くにいます。バルーンを手にとって、ジャンプ台を使って持ち上げ、5つのバルーン的位置が入れ替わっていきます。けれど1つも足場として積み重ねる気配はなく、ミスティアには同じことを続けているだけにしか見えません。

すると、天井近くでしばらくバルーンを運んでいた探検家が、バルーン1つを持ちながら下がってきました。魔力球に触れて、ジャンプ台を動かして、みるみる降りていきます。それが無いと数が足りないのに！ ミスティアの焦りをよそに、迷いのない動きでバルーンを置くと、今度はジャンプ台を持ち上げ、先ほどのバルーンを足場にして……。

そこからはもう、ミスティアは目の前で広がる光景をただ見ているばかりでした。縦横に梯子を走る探検家、華麗なバルーンさばき、あまりにも意外な手順の数々でジャンプ台とバルーンが上に運ばれ、すぐにバルーンが4つ積まれて、最後のジャンプ台は4つ目のバルーンに乗せられる高さにあります！

伸ばされた手を取って立ち上がったミスティアは、夢中で梯子を登ってジャンプ台を持ち上げ、バルーンの上に重ねて跳びあがります。そして屋根裏部屋から振り返ると、探検家の姿はもうどこにもなく……

——梯子に挟まった熊のワッペンが微笑んでいるだけなのでした。

【ミスティアは シルバーオーブを手に入れた！】